一話一言 十下 止

太政官文庫
和書門
一二四九八號
八〇函
一二架
八〇冊

内閣文庫
和書類
一二四九八號
八〇冊
二三函
一九架

内閣文庫
番號 和 11498
冊數 80 (9)
函號 212 275

內 一二七八五號

国立公文書館
National Archives of Japan

武家軍談　抜萃　一張一書十の巻下

一　簑笠の事　中村式部少輔

天正十二年四月九日池田勝入父子森武蔵守

と此讃すれハ十一歳なりしも及ハれぬ人数なり

さう御手松倉にて蒲生氏郷の千文字の旗なり

只壱人勝入々数万の陣へ懸入て実捨て御

天下に名高く武勇　中畧　此手柄上方へ聞へ出来年天王

寺勝曼の旗又貝殻塚の旗扱ハ備中乃備後の旗

なとそ中伝われ此度乃手松ヶ旗ハ家代常に持

し　下畧

文部省文庫印
図書局文庫
内閣文庫
内一二三七八五號
文鳳堂印

一隆宗瑞老井之伯耆守 諦延庵 無之家ニ伝 背被見
之の古物ニ而ハ 大納言殿所持の茶入出 下器
一天正十九年ニ而 秀吉公聚楽所ニ於而茶湯
被有 天下の諸大名町人まて此様ニ召候よし
千利休御入ハ肩衝など茶利休ハ石燈籠
なとまる日耕庵ニ上たる此肩衝の茶入諸の八日の
月之利休上ニ石燈籠大寄の写八石の月ニ在り
一人ハ新茶の御数寄 一人ハ茶壺の御数寄なされ
一古人の心一同して奇妙なりとて 天下ニ知る
永而法なり 八石の月の肩衝 ハ大坂落城の附
焼亡せしとて 生駒宗内か御所持せられし八石月の之

物ハ肩衝の焼失之月之為而ハ如くこれ之為 二之上八御
肩の上これ出るとて中々之其外此茶入而られし
一近代世宗勝ある茶人同名たるなど描して世之生成
称まて
三駿河
越後上杉謙信家老宇佐美駿河守定行 甲斐信玄
内加藤駿河守光貞 安芸毛利輝元臣 吉川駿河
守元春 此三人之
三勘之清
在の添紙加備二戒内 松江勘兵 田中太郎加備前政内

其郎来高本和宇多内藤ヶ郎来也二人
与兵郎
毛利家の浦名郎平等徳川家臣伊井兵部少
輔直政
一 飯扈小勇士所として其中の如くなる人の田上杉ニ京伝
内川田豊後信親いる者なり　掃部様ニ相なる
百部信綱いる者 武田信玄家ニ山県三郎兵衛昌景又
福島左衛門大夫正則家老長尾隼人
一 猪いる者 名れも太閤の時 長尾隼人之ハ山城
久しく息にて伊勢神戸蔵人在城の後ニて
其家の臣之父ハ小野云蓄と云 也伊勢ニて

安芸備後ニハ福島家ニて 隼人ハ一万石を取
し 安芸東条の城主となる 此人の田隼人ハ作
来印ニ白綿之吹貫之 隼人大刀ハ長十幅一丈の
四目結の白母衣一ヶ所宛ニてしける縫の如くに
出来出しけるに此定し たびしてもて 大坂所陣の砌
掃部様ニ隼人士の中の人参と出来所ニ被下
隼人孫ハ森内記長継事 兄長尾出羽と以子
子孫松平摂津守ニ仕ヘ隼人息子長尾郡来ハ紀伊
大納言様ニ仕 息子父兵部 其後 勤仕
まて
一 鉄蓋ヶ嶽

中村式部少輔一氏か甲也又柴田伊賀守か甲とも
あり

一唐冠の甲ニ執着尾の指物　太閤秀吉公

一細川三斎ニ奉仕せし老人語りして常ニ有りし
かたり物語ニ於摂州一の谷二ノ谷と云並ひし峰ニ一の谷
の峰を鉢蓋ヶ嶽と云其後従芸州様越中守
三斎様か甲ハ一の谷と云明智左馬助秀満か
甲ハ二の谷と云但一の谷の甲ニ並ひ名物なりしと
いふ事により二の谷と云柴田伊賀守勝豊か甲ハ
鉢蓋ヶ峰と云是ハ一の谷より手ニ入てといふ也
惣して名物の甲ハ蒲生飛騨守か小水牛黒田
長政の大水牛日根野織部か唐冠京極政守か十王
頭福島正則の四隅鹿の角本多中務の忠信甲
并鹿角唐の冠の甲蒲生氏郷の鯰尾并南蛮
鉢伏本多内か足り蛤細川三斎の山鳥越中守殿
か一の谷明智左馬助か二の谷柴田伊賀守か鉢
蓋嶽矢田作十郎か鯉の甲武田信玄の諏訪法
性天下大将軍秀吉公の八日の月家康公の
御長角頭巾の御甲是等ハ名物之如く加藤清
正の長烏帽子蒲生氏郷か帽子なとも世ニ名
ある甲也

一池田長吉入道の物語ニ日根野織部か唐冠

の甲の上物鐘馗年 印人ハ手振之 作者の年の
上物ハ半さより折りたる柄より先方打
ニ相成く

一 近角長政ハ手ニ宜ひしハ上物等物ニても海老
をニしく 揃たる紐を又ハ 御附りたる柄を 字之
此ニ揃て 籠手物なり 上物中完城あけ文字
ニも完紙あけ使ひし 継付てし 之自分の
大分年乃上物もニ書く使て 継付られたる
此手附こたる人なりしか

一 文禄十年よ 三好も作之来る候軍作候来ハ東
山ニ陣え 三好ハ紀ニ陣え 無く 鑓合ハ 三好より
使ひし 此方ハ中村新兵衛と云ふ覚の名誉出
し下けし 其之より 尤ニ鎬合 覚の誉を出
れ手鑓の 備へさせ 兄物をてし と云 作来り
江州一番の相模 安藤等と云 太閤の老など擢
出し 則方 備へを之 候覚等の石地蔵の前
ニて 出合ニ原ハ素鎗中村ハ十文字や手ニ力を
出し 戦中村逆ニ原は突外 首をとれ 此中村
新兵衛ハ江州の侍也 鎗は合て 十七度首取候十
一ある度鎗中村しと 太の戦の附 中村り鎗十文
字の鎗ニ当り 石地蔵ニ鎗痕付など鎗先ニ石切こ
中付 鎗の痕のことく ありけるを 末代乃志るし

ところ之永京ハ丹羽長秀ニ伝へたる 永京実翫

酒之一つ之実翫随も度々の膏切落るく 是の急

将ニ清経 信長ニ伝る ニ字 永京名物 徳川

清須安藤紀伊守 光成ニ御公ま之

一 上方ニて大合戦と云ハ舎利寺合戦之事なり

初ハ享禄四年六月 摂州ニ細川高国と細川晴元

との一戦也 此一戦ニ三好海雲先手ニて高国を切

腹させ畢ハ舎利寺（天王寺東一リ斗）より 将軍して尼崎

の勝へ其日入寺ニ切腹を遂代乃大合戦之場の

舎利寺合戦ハ天文十六年七月廿一日 畠山高政

と三好入道宗三との合戦なり 大合戦ニして細川

方落 同山城守 安宅ホ集人 其數百人 討死畠山

高政方ニてハ寝返の兵之 三百十余騎 討死 高政

将軍ニ如く 河内高屋より 高政の父 政長付将

横護入道好方 将軍之代州畠山高政の家臣

木年ニ御討死 此年ニ御ハ光源太刚の考之五人

計の級被取なと云物ニしるし 銘所ニハ二句なと書

つくら 遅在天見歟 然延出付 継取ニハ一首の歌

なり

人ハ出さし出ぬそあらうれ軍ニ先ニも先陣なくせは

名の云物ニし討死之 此年ニ御ハ 天文十五年

正月十七日ニ 河内高屋合戦 上高合戦ニ 一番鑓

令申し候乃大将本将左京亮と長政ハと申し候
被成ニ百日鉄炮打之高名十二三度彦五郎
感状十六度蒙忠節の事之比度合利寺合戦の
討取鉄炮打ハおしまれ候ての者ハなし右之衆ハ指出
此申と申ハ高名の者にて片桐市正秀吉之衆ハ
能成家の指南役ニて細ハ人ハ出指出此ハそれより
其様なハ年と申ニハ身ハ秀吉ハ家にも[illegible]
人ハ皆さし出され候てそれより是ハ草の内も出陣とて
とも越へし候らるれたる事ニ千秀吉云即出し候指出
此事ハ重へし此者と申ハ従身ニ本内通手柄
高名仕高政の家老指使所用ニ長孝ヶ感状

本云年芥川合戦以来高名十一ヶ高名抜群之（キキツトテ）
御座候と云也高名十六度と云ハ御座あり
段云本候右京ハ細川家の大将大剛者やまさう
と請きさハ本あり候
一 古人の云度討ニハ首取させぬ法度天庭趣行し
首取ニし渡（御旗ヲ附属之）算山にハしハ北方度ニて（天正三年五月長篠ノ陣之）拝ハさせやし
敵火ニしてより明ヶ本ニ趣きて一番鑓いたし候之とも
首取ニし候罪より之候戸田半平試の手に首
の首取さし候末年二番鑓被れとも一番鑓とて
ゆる天庭趣ニハ度討ニ候を首取させ候まし
きしくさしき戸田半平ハ許しし草[illegible]

折紙まで添へしとて茶碗を給はりしとや伝はりて候

よし

一森三左衛門可成が孫勝蔵長可 後ニ武蔵守と云 次男ハ森蘭丸

云頃五才の年より信長に従ひ寵愛の小姓たり

其頃何方の君の寵の厚き寵臣せしに付お蘭殿

少き竹乃枝と折節の事ありしの人ハ子供の世に

而て及ばれしと見へぬ者の日より脇竹也けれハ

こそれ大茶碗より一度入節のつきよのよれよ之

なりけらん御すくあそばし 茶碗と申し

御節などあらはれ下され 入るやうにして節なりけれハ

茶碗も茶入もこれもこれお前にあらんとなり

念珠入たるを渡されしにハ おらん ゝ 候得とおほし

召仕せんとし信長公の如き寵愛なりし 竹枝の

補助なる仁なりし武勇の誉ありしも左 十六の年

に 主君の御前にて討死しとなり

一 戸田三郎四郎 後に蔵人と云 本田忠勝の女聟と 竹の出しもの

一 天正十年三月武田勝頼の弟仁科五郎

信盛ハ籠城にて信州高遠城と申所に信忠公攻

られし 一説ニ高遠城で見知の頃 中島

高遠城一番乗せし 信忠公の小姓 山口小弁 佐

々清蔵ハとものに十六歳なり 清蔵ハ越中の守たり

佐々成政と云大剛の者の甥也 小弁ハ山口

佐貝の人物を其の子なりけるとぞ容顔美麗
並なし其中に抜出たる佐々清蔵ハ難世なり
の体をよくいひし少年八十余人まてとりわけ
御前新なり此度も戸田大閤のこと第一番
家にこれありける名を召る者人とぞ手柄様
なるひとり手段にて受信長にも尽さず遠ざけし者
今たる事戸田半右衛門権兵衛なり業京者ら多勢
主膳并者人乃内外小姓なりとも出御厩御感伏
其下出会少年ども悉く遠ざけての御帝代
の至りし様々ありしとともに人一入満足の如くに
て御参りまつり団久の御膳椀に御感状にて下

次に佐々清蔵とて去る遠の御前にて低海を
手柄強き者大閤の内蔵助娘婿なりけるとて
其後光秀の御勝利御感状其下信長公大度
給ひし人傑也乍智世の及ばず何の小兵八歳より
その名は八手柄の者諸方帝代之清蔵ハ細川内蔵
御名まうし上たる御感状の御意とともに太刀小筆
人も八一言可太刀の事さえ信如く手柄
の小兵清蔵年自然十日余り立京二条の彼
にて信長公を以て光秀謀叛仕る出人とども
に十六年を一期として討死せしこと然清蔵ハ
小兵より回し云ハ称し其られ有り尻のよ聊し

いさ部具し討死せんとて五人ともに寫く
出る一人究竟の相手を死骸を携のうちへ入りき
千々足甲をぬかせ五人ともに見し 又切て出大
將に渡し合討死せしかども實實部に血に滅
壁も乱れしとみる人涙を流し五人の首の
前ハ群集せしとかや

一 天正十年二月穴山梅雪逆心に付勝頼も諏訪
より府中へ 織田城介信忠ハ仁科五郎信盛の
籠りける高遠の城を取囲責落しかゝられ
く使僧をつかハし仁科五郎諸家侍を細と
武田家の人大将逆心仕る者多きに候

諸々城に於て心用ハ諸家臣しきを仁科五郎
小山田備中判官使僧の耳鼻をそき返しけれ
一戦を仕るべし 城介殿以ての外怒られ
一ゆ攻に攻給ふ 小山田備中切て出城介殿に
向ひけりけるを 後に仕へとも五十ケ所の疵に仁
科五郎も備中守も渡り合 今は是まで
合鎗又うつて仮殊に入 以下十九人大膳ありし
に籠り死骸に於て城中ゟも年比二十余
女房衆の奥にて太刀を振り 其年に至し
諏訪殿の妻とて 七八人ともに
手負自害せる大膳は七十三に二ヶ所の疵なり

此ニ爰ニ籠りし處寄手も攻あくミ掃部信忠を
落葉合綱の母なりけるか広間の前の櫓ニ上
りし悔しさ渕く桐の木ニ取つきたる所を
見人て此ゟ知ニ登り遂ニ仁科か小山田備中共ニ
立て自害しける遂ニ掃部の留目に立遂ニ打
せし人のことくハ彼大広間天井も狭き程
太刀打ちけるニ血ニ染りし所ニ庭ニ飾りたる
しつ血かへり紫雪にそまれり地下人とりも掃除
に来りし居る老若ともにしハ其場の広間のとり
掃部居る間ニ年ハ鍛へし此時打死せし人々さし
此れ三輩し小山田備中も仁科か居も掃部居と

見てより十八度も切りかゝりしか刀の舌打絶打出て
はたして掃部殿此時桐の本ニひかへ居たり扨
殿のうち二人の大将なり後ニ切り付る血脇ニ
け射指の打は節血にまみれ一天中もめくる地下
人ニ手すくなき大将仁科なる殿此席ニ入り自害
腸を振人ミ切り裂きへ折り身をおし掴ミ十指の
打もてし仁科殿八年十九歳にていまた若輩なり
御座なれ共最後ハけ居振舞天晴けなれハ洪妙
の事の打ハいふもおろかなり是とそ手本なる
誉る可仁科殿さしも信玄公の御子なれハとつよく
此御中小山田備中をはしめ十八人處ニ打

ゆくゆく森腰の岸の磯に至りへ よりて板など重ねたり
て上より渡り給ふ事もありしと語り侍り 後給ふ
一よの宿など云遙の杉林など見えし 見えたる所に付て
節ひしとぞ
一 三宅浦江遊ぶ 日暮一夜泊りし所なれども
佐之出し 二十の大船の事の白旗の浦風
待宵の伝ふる雲路など聞きて世界足なる
思ひし二の石といふ名の肩の申しを見しに 光秀が
たり仰に水に溺して死なんといふ時 海石に於て仰
よ坂本の城に入る 又浜より尾張まての
海上を渡り湖を経る遠浦など記しける所の足毛

つゝ平坂湖の辺は竹の所へ光秀にて大津の
浦に謡ある秀吉の軍勢を撃ちけり 猿子人へたりや
たゝ今渡しも出し かへ八ゑ色 道 よみもしく
湖たゝみを唱す 浜辺のたゝ今 なかく 舟
浮へ家々一か所のをてよりて下し見合なる寄
網打の板に腰などうけ 返事へ叙し給ふ 遠
見しく体あるは返事の紹見る所にとうへ所に
たる分かなひとし弁舎唯一あ僧に坂本の時々
家御かし挑の所中ヲ十五丈あり七丈の余とて
るより越り手綱の事ありと切て 書の酒子
につ前得て付記とゝく法 失うる出し紙の留

左京卿秀俊出家して浄白となりしと也
自ら鍛ふ作刀平安城八幡にて入道の光長の関方
自称天狗と云 是等の子供などを居ゑ の上へ焼
草紙也附飾て 秀吉公の出せる 雲霧のごとく
乱入て 十五壹の為につかまつりたる所見附
秀吉公上る 太閤となりしし 大坂にて如く 豊年
志摩守嶽へ 金銀にも下されたるまゝ 如
程の名高き 極秀吉公の御人数七年八年に居る
などとりまぎれ御留守居卿八光秀安去の時にて
去事にて 御国光の御太刀二字国俊の刀 薬研
藤四郎の短指まで 紫乃 肩衛て所持の名物

みこのみさしし 豊臣の墨蹟など 京都の宿所に
包みの天の御ちて 持主居守の郎党走へ持来
し太閤在世中には 当手の人々へ十二日の逆
命を討死仕には 妻子などしらずけ左京卿も必
自害仕て 従兵仕るに 歎きしに 遂に大坂天
下の至宝を蔵しける人なりし 秀吉公以前 月様を
御しまひ将軍家まで むなしくなり行くと
て居ぬるより彼の品々ども など 宿所に包み下へ退下
しに妻子数子の老ともまた 如何なる先年 板木
深山々々鳥門様にて 年中の名を 添ひまたりしたまた
身も 切腹せしとは 名剣の 感ハなかりし

千畳敷ハ小牧山へ移候ひ由来の品ある甲白綿
衣裳の具足羽織と秘蔵せし二の丸の甲は
後しも光秀坂本の城数ヶ所へ持参し明智左馬介
只今自害仕り此甲羽織を着ながら目の
此節筆紙にしるし今に西尾深く蔵し其光秀
妻子従者自分の妻子を刺殺し焼草に火を
かけ居ける中に煙立上る時も信長十文字の鑓にて
切払ひ天守に上り長谷部藤蔵御成り
と感涙を流しぬるハ一旦落し畢而十余年を
経て宝永年中の頃に白綿の羽織と二の丸の
甲ハ西数ヶ所に取残されし結城寺の櫻井山中

佐々ハ右後彼二の丸の甲を所望して紀州へ持参
したる歟年経て後稲葉大学と云人の手ニてとり大学
死せし後紀伊中納言光貞公の御家中に住る
遠藤帥孝定光秀末孫にて二の丸の甲ハ今ニ佐
々遠藤帥所持せしとや

一
濃州長良川合戦ニ信長公の御前ニて斎藤家
老稲葉又右衛門と云大剛の侍を討取の時池田勝
三郎信輝と佐々内蔵助成政と相討也信長
公御実検ありしに勝負決し難く佐々ハ池田相討にて
分けしと望ける佐々ハ池田一人ト云名を争ひ池田ハ
佐々一人ト云名を争ひ相論不決大将ハ人の好むる

とかハ世の人情也其ハ門番一年に譲り置し給
明智に何とやらん是りなし信長公ゆきさしあ
しく書出したる人に気を信濃守主として信あり
今言とかり是度其君に今言覚主として其の信
信長公ゆきさしたんわしきは其身をも此首ハ池田り
是なりしても度々信して是なりとても然し多人の
けるにかもしかりける信長公さて多人の内に一人
其是ハ此首ハ誰之是なりとしも露や湯帷子かと
多人何のすもおく氏のことく首の蓮(ホゾ)落すてれ
とかりける其家の小性なれとも笠に信長公ゆかて
りん画りける深なり

一むかしより皆兵の後代之後ハ武功を立しける武士
ましてハ無也　下略

一永禄四年三月上杉謙信ハ鶴岡へ入給ひ露ケ岡
の社前において笠(?)になしける関白前久公
御下向公方義輝よりハ大樹名代にて上使たり
其時関東八州の大小名列座之時に下知の御威風
と小山政殿と座乃論あり謙信ゆるして曰今系
殿ハ関東八州の侍士たの上たるへし又小山殿ハ関東
八州の侍士の下たるへしと裁判ありしかは静か謙
信甫之御威光智ありしと天下に誉けるとや

一三好長慶ハ光源院義輝公の執権なりし天下の仕置

一 去ころ天方に三好筑前守之長好か弟実休と云
其子を筆先と掃部守長慶と云 是も四国の
守護細川讃岐守持隆の家人也 持隆ハ当代将
軍の御代細川刑部大輔殿なとゝ管領なり
元九代の孫也 阿波国勝瑞に在城之処ニ天文
廿二年八月十九日三好実休逆心し 城中へ
使者として細川持（抒）隆ハ生害之二十子是之当時切ふ
殺害す三好か紙しし 剃髪持隆後を
宝心を実休妻女として一旦逆瀬居永禄年の
去京郷中く 彼衛三方余りし 京へ攻入
しかハ公方義輝公ハ是も八幡山へ出持籠 三好長
京も攻めと河内の飯盛ニありしへ持籠りける所に依之
義輝先年御生害 山科ら宗秀八幡山を責ル 伊勢
の北畠源中納言具教卿 畠山尾張守高政も依て
本一味之 畠山高政ハ紀州根来より討之 根来
法師と語ひ泉州へ討て出る 泉州ニハ長慶か
弟十河一存 安宅冬康 三好彦次郎 同左京
主税手勢新兵衛 岸和田に籠城して 長慶ハ
政と防く 実休ハ一万余にて阿波より渡海し
岸和田の加勢として泉京太宰と入定 実休ハ
和田の東久米田寺の山に陣をとれ 久米田寺ニハ八幡武
天皇の御願ニ行基菩薩の開基也 此寺建之

一
のまり〳〵ハ構佛見えこらや別此迄ゝゝゝ　此未未写
一往点ハ浜抱七挺南附御衣あり
百月より出箱菓子之布袋の画に飾あり
坪飛り出て人間に到境　此ほと布袋あり
右振月より出箱家形之ネアノ画ニ飾アリ
福禄寿萬慮忘る鏡此空　此ほと重屋アリ
六十月より出箱家形
雪
号
元荘
十五より出箱家形
鶏

寿巻月より出箱
霞箱
一箕十丁ニ入タルト云　茶臼山ヨリ大坂の御陣
わたしと云伝々
六百月より出箱
霞箱　以上これも同し
此二ツハ別ニ秘物ノヨシ御役ニ遅速ハリテアリ
扱モノモ麻ヒトトヲ茶ストモ云　高井湯扱　寛貝ニ太
大箱ツ挺ノ重サ凡三百貫目以上モ有ヘシ
一
古今弐
太宛りし　わか身まかりの袖も枯ゝゝゝ

楽天詩百姓多寒誰可抹一身雖煖亦何情
安得大裘長万丈一時都蓋洛陽城
一或書に織田信雄と假名ツケテアリ 然は信雄の雄にて
カツトヨミシヤ
一太極に楊春暉といへる醫師あり もと唐州の人
なりしとぞ 西土にて遍歴して 肥後薩摩にきたり
勇術をもて大に見はし 西遊記と云ふ 十巻あり
一早然おとて 天明三年卯ノ比より辰ノ比にわたり
一儒をとつめし 浮遊せしとて その西遊記なる
その書わしろきしと 仲庭春子は徳えたる書なりか
たる

一天明八の比 ある日の比 諸子とともに 傳文の 書は
かなにうつし 孟子の文など 假名に なをして 和文など
書きし 文章の稽古とせしに 其章に
助長の論に 宋の人に百姓ありけり その作るところの
苗のすぐくのびざるをうれへて ことごとく みなと
てその苗をぬきて 川のなかにしづめけるが あくる日
親つねに行きて 家内のものにかたりしは いかゞ
今日つかれたり 苗ののびざるゆゑに
手伝ひて たすけて 川のなかにしたりと その
子おどろきて いそぎゆきてみれば 苗はみな かれ

りれたり
宋人有閔其苗之不長而揠之者。芒然歸。謂
其人曰。今日病矣。予助苗長矣。其子趨而
往視之。苗則槁矣。
かゝりけれバ世のなかハ盛きも法文にハかく
説く簡に出とれり
神農の言を学ぶ許行といへるものゝ人のうち
と陳相よくつかぬることとぞ云者
孟子そのかくいひてし許子ハせひともれまつりしか
粟をとうへてしきりしてその葉をくふや陳
相答てしいひてし左様なり。孟子とふていはく許子ハ
せひとも自づから布を織てあらしてのちにきるや
陳相こたへていはくいや左様にハあらし許子ハかハ（のも）
衣をきまして居ります。孟子またいはく許子ハ冠をきまく
居るや。陳相こたへていはく冠をきてをります。
孟子とふていはく何の冠をきまするや。陳相こたへて
いはく素（しろ）ぎぬを冠として御たる冠をいたゞき居ます。孟子
とふていはく自ら織るや。陳相こたへていはくいや
左様にハあらし粟をもてかへてきます
孟子のいはくいはく何ゆゑ自ら織らぬにハきまいれ
きかや。陳相こたへていはく耕作の邪魔になり
ますゆゑでござります。孟子とふていはく許子ハ釜

あれ志蓮務でおかゆかしてをひ後巻の撒御と
ゆゑ耕作をるや陳相これをくいふとも大抵かあり
孟子をふかく曰これもさづく似たる用ひたる、
や。陳相いふとくいやたる種でありし粟をとりく
まへ孟子曰許子ハ必種粟而後食乎。曰。然
許子必織布而後衣乎。曰。否。許子ハ衣褐。許
子冠乎。曰。冠。曰。奚冠。曰。冠素。曰。自織之
與。曰。否。以粟易之。曰。許子奚為不自織
曰。害於耕。曰。許子以釜甑爨以鐵耕乎
曰。然。自為之與。曰。否。以粟易之。
註 此語ハ反皆孟子問而陳相對也

平治物語ニ光頼参内之事條

問。 答。

光頼

サテハ主上ハイツクニオハシマスソ。黒戸ノ御所ニ。
内侍所ハ。温明殿ニ。剱爾玉ハ何クニ。夜ノオトド
ニト。左馬督次寸ノニ尋玉ヒケレハ。別當カク
ゾ答ラレケル
和漢ともに文の妙をえたるへし

昭元左傳

宣子遂如齊納幣。見子雅。召子旗。使見宣子。
宣子曰。非保家之主也。不臣。見子尾。子尾見彊。

宣子謂之如子旗ハ。（見宣子見履 覧遍反）
此文二事ヲナヒテヲ文ヲ互ニ記メカタクハ略ス
妙なり
真言秘書のよしある人のかきてまうされ

一 三寶院許可血脈 私口決
三 （三帖之内第一）佉汀印明 私口決
三 （三帖之内第二）佉汀詔文
四 （三帖内第三）佉汀血脈 和口決
五 蘇悉地汀印明 私口決
六 第二重 和口決
七 第三重 私口決
八 瑜祇印信 廿七尊 私口決

九 瑜祇内作業灌頂 十五尊 私口決
十 瑜祇灌頂 一印明私口決

傳法許可灌頂印信血脈

昔大日如來開大悲胎藏金剛秘密両部界會授金剛薩埵百歳之後授龍猛菩薩如是金剛秘密之道迄吾祖師根本阿闍梨耶弘法大師既ニ八葉聟ヲ今至愚身第卅三代大悲胎藏卅二葉傳受次第師資血脈相承明鏡也小僧數年之間盡求法之誠幸隨先師義縋法印蒙灌頂印可候阿闍黎印融深信三密奥旨久学兩部大法今機緣相催所授許可灌頂密印也能洗五塵之染可期八葉之蓮是則酬佛恩答師德吾願如此不可餘念耳

長禄三年己卯十二月十五日
傳授阿闍梨法印權大僧都賢継　金剛佛子印融
奥ニ文明十戊戌七廿五記之
三宝院許可血脉
金剛名号　遍照金剛
右於武蔵國小机保鳥山三會寺授両部大法
長禄四年歳次庚辰十月四日斗宿日曜　畢
大阿闍梨法印權大僧都大和尚位賢継
寛空授元果印信文云抑遠自大日如来迄于
禅定法皇胎蔵界十一代金剛界十二代相承
傳来等ト云云
康保二年歳次乙丑十一月廿五日辛卯
元果授仁海印信文云遠自大日如来迄于蓮臺
僧正胎蔵界十二代金剛界十三代相承傳来
等ト云云
永禄祚二年四月廿五日
已上或記ノ説也為ニ廣ク知ン方記之
本云
于時文明十年八月一日記之金剛佛子　印融
依汀印明　私口決
抑佛何坐五體ハ胎音ハ金諸印ハ皆胎諸言ハ皆金ナリ
居ハ金臥ハ胎立ハ金坐ハ胎行ハ金留ハ胎動ハ金静ハ胎行住

坐臥四威儀挙手下足皆諸聲言音皆是金剛
眼金剛眼胎也是則両部不二秘密曼荼羅也故
瑜祇経云所出言語辨成真言等云云已上
重々並口決開道場之口授注之為不忘也却世
可破之注紙面事往昔蓋未在之有恐有憚
云云　已上元海記　七第三重私口決

追加
御筆印信曰
大日如来金剛所説一行法法身即自身成佛印真
言
[illegible]二元　三衣　二作

虚心合掌屈二風拄二空並竪成
右弘仁十一年庚子五月三日於東寺
実恵大法師授之汝雖入寫瓶
室不幸器故又眞雅大法師
授之可入室之耳
入唐沙門空海

第三重　同上
金剛阿闍梨教諸弟子以緋縵掩面與彼作加
持令次阿闍梨教彼薩埵誓置花於印中
令彼散支分随花所堕処行人而尊奉教彼
本明印令其作成就此右金剛手内作業

灌頂ト極秘密ノ中ノ秘ナリ此名五佛源ト金剛即宝覺
蓮花即羯磨佛部和合同一體也（已上惣五佛）即此身五
佛ナリ（共ニ佛部） 右ノ臂ハ觀音部左臂ハ金剛垂ナリ 項上ハ摩
尼屬多四維毗倶胝ハ並是ヒ羯磨ナリ 三世ト不動尊ヲハ
即名ニ四攝智ト喜戯ヲ名ニ供養ト虚空眼ハ外ニ持ナリ金剛
光ハ彼岸ナリ 即名三十七ノ最上極深秘密法佛秘成
就ト

已上

九 瑜祇内作業灌頂 十五尊 私口決

同十二日記之
（季按文明十年八月也）

一 [illegible]の忌といふ事 日本紀略 圓融院の条に
[illegible]方忌の[illegible]日記 并 東鑑なとにも見え
たり 保元之擾攘の[illegible]
一 むかし [illegible] 天主教をひろめんとてその
道法[illegible] 停止して [illegible]
[illegible]人の[illegible]
呂宋國王郎敝洛黎嘮君迎 謹沐傾首書于
日本名高國王陛下 昔者已有復書言謝茲因
山廚羅明敖寺巴礼寓薩褚瑪称欲往名高
謁見
聖上恭惟

聖上當知此山厨羅明教寺巳礼乃呂宋分派
徃寓貴國彼為人聰敏得道好為義事 教
本朝于系蝋氏「一統」奉祀一位無極至尊名
賽氏乃天地万物之主 僕等 棄邪皈正破暗崇
明義升天之大道于是
本朝于系蝋氏一統
皇帝及諸官長至士庶民無不欽羨而讃楊之
然此巳礼徃
貴國非為世間金玉之玩好止欲人超拔魂昇升
天受福無窮偏到陛下乞存薄面喜善而復陰
毋斯遐棄則 僕 佩戴旨敢忘乎其除別寺巳
礼寓
貴國尚有数年矣伦亦如此善心乃
貴國人民既所識也第因海天遙隔不得躬造特
書上達伏冀如面 僕 不勝 照字アル乞 欲之至
亜壹ノ千六百單肆年柒月念捌日郎 敬洛黎
勝君迎再頓首

按歐羅巴ノ年紀天明四年ニ至テ千七百八十四年ニ之此千六百四年ト云ヘルハ慶長九年ノ比ニ

一中京ノ廣通 応経年孫 撥不男 遠り字 和寄をよくせり加了ゝ
たゝゑのよ
梅山處 山ふわ子
もとは玉のきそゑのへいともとゝにためし社以ひ
ためしとしへあるとかみにのおしくとかり

山寺のさとしのとあり、わすれて有とかく侍子
人のとかくおほしすまし給ふをし又につく〳〵おほえハ
いつきむすめの心おもはすなきこの山の月日の光おもさく
らかなるあるしとおほしめしたし給の山中の秋
つねの菜をのゝ山下つのねみかせにさつとみえたる
らきあはく侍のほのきしれよるかとよるのおよ
世の中ひをようふ侍るさらひなひかせてゆけをやこ
のうつるには清されたるをもおなしや侍るへしとんこれ
らハみをかしこくいとふり給心よりして御もお
られもなさけあれたる思ひよりしてこそりひある
事も侍るへくれ侍りもいとめてたまし給へ

ありかたしとつれ〳〵思ひくらし侍るものから
あはれなるにも、さひしさに松のひゝきにめなみ
におされ侍るつきはおもて移ろかしこくつけてせおへ
すにこそくつ思ふるも我にとりてもなほおしも
おもひ又いかにもしあやのはおもかけもゆくえとた
しても何ことたのみよきめあかすんなるほにしれ
ゆめにハおもひておやしう若くもりこそ侍れいさ
いつく侍りしおきてのはしより稀まほえさして暁に
いはるまくらひし花侍るやいつ侍里よりさの
こ遠かたぬ西にはおもかけし山里めいさまかりしある
人ありくまかり侍る道すから夜ふかに山ふたえあり

谷ふかくして松のおひたちたること限なくもおほきことは
やりに枝をつらね侍る陰なと中々かしこまつたきの
ハナのちりまかふもなくわかさの実の岩かともなし
梅の木ゝさかりつみむかふくれなゐ
しらくもあまた人なくて鳥の声加はりけるよく
きこゆる山水様にて風の音もひとつにしかゝれ
きこえてうつくしきのやうなるに竹のきこえけるの
かほたるをさすらひのかよはするおもしろき
ゆひ侍るとおもはいもせて内にたち入侍れはいさ
こなたに百合めてたくして庭の面いと広し
みんなみおもての木のこすゑすのふかりけしく

ときうつりてあくかせたえて木ともいとうるはしく
大きなる木に花の咲かかりたる花のこすゑひとり
なくてう鶯よつくし山吹のさかりのゝ常盤を
やよひの末ふり侍らん時なんはまつふうぬふやなしん
とおもしく卯花の雪もなしさゝのしく
岩根の陰にまくも庭にとれふたてしと思へるある
しの心ちて植くこ床のこすゑゆかりしけやうち
よりかしけたるつりたのいてきさるとさ紀にたて
きのこをゆくにしも扉めく所にとさりてもや
とおもしるれにさもあることたちさくらのおもて
侍らしさてやみしといふめり男ともハこゝに見ゆる

出たゝし給ひてこゝめしたるよろこひらうしさく
くらふ旨のうちにもさのミ徒たりまいん人とも
是に申色よりハまさ礼る人とハ志らせし者ら
しこ年ゞてものゝけ給ける年しの比いよゝ斗ふ
てうけさらら猶とまゝくまゝにかゝるしゝくの
ひさし気ゆ向くひけりちや何事をといふともなくれと
まそく八世の事おさとゝまるこゝちに壽なとよ
まかし日れとひまなき物語りしよると出に
目られゝる猶ふりてうき殊ぞくやうなてめさま給ふ
いくたひとなく給るもおもし哀れしさ清し
たりつれし思ふいりなるさきゝの世のちなみ給る

人ゝや又ハ猶の世んかゝる契とむすふつ多気尓し
給ふ人ゝやと久しくつきるおりハ又もまれし
り在とこひしく初おハ色なる仏法をけんかう
つゝそもさりあらぬき世に年へてお申しるすい
なるまの奈るにいく年にて給ふをのかゝよぬ
ハゆめそいとまかなる縁と思ふなうつきゝし
ばゆめまたく給りくさむる猶み思ひつけ給り
ぬれ

うつゝともよのむもおもし中空の世に
ゆめ成ゆきとも何かさらゝめ年

寶暦十二年　ひろ通書

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan